

付録

トークイベントの後、登壇者の佐藤壮馬さんがイベント参加者(Aさん)からの感想を共有してくださいました。本テキストは、その感想と質問に各登壇者が返答するかたちで、登壇者間で行われたメールのやり取りの記録です。

Aさんの感想と質問

トークの中で、平川さんが「たくさんの人に作品を見てもらっているのに感想が聞こえてこない!」と言ってコアな話へ突入しつつあったのに、「アートは必要なのか」「なんで札幌で制作するのか」という話題にズレてしまったことが非常に残念でした。私は佐藤さんたちアーティストが、「札幌の人たちはアートに何を求めているのだろうか?」ということに対する考察を語ってほしかったです。

たぶん平川さんの発言は札幌の現状をよく表していると思っていて、人口の多さのわりに目の肥えた観客が育っていないということなのではないでしょうか。アート鑑賞を日常的に趣味にする人は少ない。他にもアウトドアとか面白いことが沢山あるので、ここでアートを趣味にするメリットがあるのだろうか…という問いが「ここにアートは必要なのか」という誤解されそうな発言につながってしまったのだと思います。

でも、制作者にとっての環境は悪くなく、制作者の数はそれなりにいる。一方で、制作者の数に対して批評家が少なすぎる。批評家のほとんどは東京中心に活動していて、北海道のアートは無視され続けている。一般の観客も目が肥えていないので、目の前の作品がいいのか悪いのかもわからないから感想が出てこない。ミーハー精神で人が集まっているだけだ。北海道のコアな観客はほぼイコール制作者、アート関係者であり、業界の閉塞感が出始めてしまっている気がします。

…といったことに対して、制作者としてはどのような実感があるのかぜひお聞きしたいです。

佐藤壮馬さんの返信

トークの話題が、誤解を招きかねない「ここにアートは必要なのか」に逸れてしまったことを反省しています。人生を捧げて制作に注力している人たちはどんな場所にも必要だと思っていることは前提としてわかってもらえるだろうと勝手に思い込んでいました。ただ、そう感じてしまう背景には「感想が聞こえてこない」ということにつながっているように感じています。毎回同じメンバーが巡回せざるを得ない状況による閉塞感や、言論空間が広がっていく感覚がなく、作家にとっても新たな成長の糧があまり感じられない、というようなことは打ち合わせ時に出てきた内容でもありました。

平川さんが投げかけてくださったことは、そもそも批評活動がほとんど行われていないことにも起因していると僕個人は考えています。展示をしたときに、自身でも気づいていない客観的な視座を与えてくれる反応、やりとり、Criticismをはらんだ言葉が欲しいし、それを後に反芻することで成長するきっかけにもなります。

そして、展示を企画することと、それに対する言評行為(できれば企画者+第三者)をセットで考えてほしいということが強い願いとしてあります。アートが好きで、アート鑑賞を日常的に趣味にしている方々は、知的な探求心が旺盛な方が多いと思いますので、素材があれば、知見を広げる機会として目を通してくれるとは思っています。ミーハー精神で集まった人の中にも、もう少し知りたいと思って調べ始めた時の広がりがあります。

言表行為をも創出する展覧会の促進は、札幌で発表することで感じられる制作者にとっての意義と成長の糧になり、この地における歴史文化の記録として未来へ届くのと同時に、現代でその土壌を共に豊かに育てていく鑑賞者の方々にとっても思索の一側面を補うものになるのではないかと考えています。地道で継続的な努力にはなりますが、札幌に現代アートを扱う美術館を新設するというに比べれば、今すぐに実践可能な小さく大きな試みであると感じています。

内田聖良さんの返信

ご質問ありがとうございます。私は出身が埼玉県で、東京の美大に通っていたのですが、「コアな観客はほぼイコール制作者、アート関係者であり、業界の閉塞感」という問題は、学生の頃から感じており、その閉塞感がどうしても耐えられなくて制作をやめていたこともあったので、北海道だけではなく、日本全体に言えることなのではないか、と感じます。逆に言うと、関係者だけで成り立つぐらいの規模のアートコミュニティが北海道にはあるとも言えると思っています。

興味深いことに、東北だと、たとえば秋田の美大では、町内会長さんや舞踏の企画を行う地域のお母さんの存在の方が美大のイベントに積極的に関わってくれて、10年以上卒展を毎回見てコメントしてくれたり、国際芸術センター青森(ACAC)では、開館の頃から、地域の市民でつくるチームAIRS(※1)が、20年以上アーティストのリリースや制作に継続的に深く関わっており、私自身も何度もリリースに連れて行ってもらったり、自宅のお食事会に招いてもらったりしました。彼ら彼女らは、作品に関しても、専門家かどうか関係なく自分たちが分からなければ「どうして?」と質問してくれますし、美術作品としての評価とはまた別の、率直な感想をぶつけてくれることが多く、そこから美術としてどうかを超えて、文化と人に関する豊かなコミュニケーションが生まれたりします。これは単に大きな組織があるからというだけではなく、地域の人達に「現代アート」に対する変な刷り込みがなく、地域のことを調べる機会も多いために興味や協力関係を持ちやすい、ということに加えて、関係者だけでは「現代アート」コミュニティが成り立たない、という逆説的な必要性の元、可能なあり方とも言えるかもしれません。

私自身も自戒を込めてですが、質問は自分が分からなかったことを表明することでもあるので、気恥ずかしい気持ちもあると思います。でも、鑑賞者の方はあまり気負わずに反応してもらえたら作家も嬉しいと思います。

もちろん、佐藤さんが言うように、専門家による批評や展覧会レビューは、非常に重要だと思います。

作家本人が生み出すことはできないものですし、あるとないのでは、記録としての価値がすごく変わると思っています。批評家の不足も北海道だけの問題ではなく、石川卓磨さん主催の「蜘蛛と箒」というプロジェクトで、SNSの書き込みベースの気軽な気持ちで参加できるレビュープロジェクト(※2)があったり、京都の「浄土複合」というプロジェクトでライティングスクール(※3)をして最終的に印刷物の発行につなげたりしていますよね。札幌でも、「出張Think School」という企画で山本浩貴さんを講師にレビューを書いたりする講座がありましたが、一度だけではなく継続的に、札幌の展示についてのレビューを書いてみたい人を募集して育てていくようなオルタナティブスクールがあったら、北海道の制作と批評(とはいかなくても、客観的な文章化)のバランスがとれて、あとあと北海道の美術のアーカイブにもなりますし、冊子として道外に流通させることもできますし、幸せかもしれません(私も受けてみたいです)。

札幌の観客がアートに何を求めているかは私に代弁することはできないのですが、ただ、感想が出てこない理由の一つには、いわゆるエンターテインメントやスペクタクルとして楽しむ以外のアートの楽しみ方を知らないというのはあるのではと思いました。そこで私が思い出すのが、「アート思考」です。私なりに要約すると(ご存知でしたら読み飛ばしてください)、学習能力の高いAIに対して、機械学習の結果からは得られない、新しいひらめきを得るために、アートが活用できる、いつ何が起こるかかわからないVUCA時代にアーティストの思考からヒ

ントを得て、生き抜く力をつけよう、という考え方で、ビジネス視点でもアートを受け入れやすく読み解いてくれています(※4)。今は古典として癒やされるとか色が綺麗な絵画の代名詞である印象派の作品も、当時は科学的な発見を取り入れたスキャンダラスな(おそらく癒やしとは程遠い)作品でしたし、「新しいものを考えるヒントになる」という視点で鑑賞することができたら、「色が素敵」とか「癒やされる」という感想を超えて、なぜこの色なのか、なぜこの作品を作ったのか、ということにも興味が湧くこともあるかと思います。そうした思考をきっかけに、鑑賞のリテラシーがあがって、深い鑑賞体験をすることにつながるかもしれません。もちろん美術教育で鑑賞方法について教えてもらうのが一番良いとは思いますが、。また、せんだいメディアテークなどは市民とアーティストが震災や民話などのトピックで同じ立場で協同している取り組みもあり、そのような取り組み(※5)からもアートやアーティストに対する見方が変わって、広い意味で「アートの必要性」を考えるきっかけになるのではないかと感じました。

※1 AIRS「普通の市民」だったAIRSメンバーは、今ではギャラリーをオープンさせたり自主企画を行うまでになりました。ACACでは、他にも企画ごとのボランティアなどが活動しています。ACACボランティアサポーター - 国際芸術センター青森 ACAC

※2 蜘蛛と箒のレビュープロジェクトに参加していただける書き手を募集します

※3 浄土複合ライティング・スクール

※4 若宮和男さんの著「ぐんぐん正解がわからなくなる!アート思考ドリル」

若宮さんは積極的にアート思考について紹介しているので検索するとウェブ記事などたくさん出てきます。

※5 3がつ11にちをわすれないためにセンター、民話ゆうわ座や民話 声の図書室など。

進藤冬華さんの返信

佐藤さん、テキストを共有してくださりありがとうございます。私も先日のトークがどうだったのか考えていたので、こうしてその後の動きや反響を共有してもらえて嬉しいです。

確かに展示をやってもあんまり反応がないですね。今回は展示ではないけど、イベントの振り返りをこうして公開することが、反応の一つになるのであれば今後もいろいろな場面で定着したらいいですね。

ローカルな執筆活動には「美術ペン」や「Hokkaido Art Forum」がありますし、展覧会やその図録にエッセイや解説文などが掲載されたり、地元の新聞に展覧会のことや作品のことが掲載されたりすることも稀にありますよね。また先日「出会いなおすとき」という若い方達の批評文集を読む機会があり(内容は美術に限らず文学や映画などもありましたが)札幌で批評を試みている人たちもいるようです。

一方で、文章として発表するとか、SNSに反応を公開しているわけではなくても、作品をちゃんと見ている人は身近に結構いると私は感じていて、例えば鑑賞した人が、その人の中で体験を噛み締め、余韻にひたるようなことも普通に起こっているはずだと思うんです。また、地元作家の作品を何年もかけて見続けている愛好家、専門家、関係者たちもいるはずだし。私はそういうこっそりとした、静かな反応(内面で起こる反応、いつか表に現れるかもしれない、現れないかもしれないこと)も肯定して、信頼できると思っています。こうした表に現れてこない反応を信頼することで、制作者自身が自分を信頼して活動を続けていくことにもつながるかもしれません。

平川紀道さんの返信

「批評家のほとんどは東京中心に活動していて、北海道のアートは無視され続けている」とありますが、「北海道のアート」に対応して、例えば、「長野県のアート」とか「大分県のアート」ってあるんでしょうか？僕自身は作品には地域性があまり出ないタイプだと思って東京から引っ越してきましたが、少しずつ作風が変わってきているような気がしています。

しかし、もう札幌に住んで5年経っていますが、相変わらず首都圏からは仕事の声がかかっても道内で仕事の声が掛かることはありません。

小町谷さんが、ラボとしての発言でもよく言ってますが、アート自体は都市文化として生まれたものであることは間違いありません。なので、地方都市において、東京と同じようなものがローカルから出てくることを望むことは難しいように思います。

僕個人は、首都圏への一極集中という状況が、アートに限らず人間の限界を見ているようで好きでないし、首都圏ではない地方での現代らしい生き方、なんというか、もうちょっと分散型でいいし、経済成長することが第一義ではない生活、そういったノリで何か作るのがいいな、と思っています。

(それも、北海道は、他の都府県とは明確に気候が違い、それこそ「未来(地球／自然／人間社会の行く末)」を透視するのに良い場所だと思っています)

なので、質問にある「制作者の実感」としては、『東京は今っぽくなくて(=未来を感じない)、札幌は制作環境として面白い(今っぽい)けど、札幌の人たちは、今さら東京に追いつこうとしてる感あるけど何故?』という感じです。これも誤解を生みそうな発言ではありますが…。

札幌国際芸術祭2024の会期中、SCARTSはSIAF2024の「ビジターセンター」として、さまざまな交流の場を創出しました。

このトークイベントではアーティストに焦点を当て、彼らの見る・考える世界に触れようとする試みとして実施し、札幌を拠点に国内外で活動するアーティストと「札幌の今」について語る対話の場が生まれました。イベント終了後にも、登壇者の間で今回のトークから派生した興味深いやり取りが発生し、「付録」というかたちで記録を公開することとしました。札幌は190万人を越える大都市でありながら、文化芸術に触れる機会が少ないという声は少なくありません。SCARTSは、札幌の文化活動を豊かにするため、文化芸術に触れる機会、アーティストやアートに出会う機会をこれからも創出していきます。